



ゼミナール

中国 文化

芸術編

カラー版

劉謙功 [著]

佐野慎 [訳]



辽海出版社

ゼミナール 中国文化

芸術編

劉謙功 [著]
佐野慎 [訳]



通海傳播出版社

图书在版编目(CIP)数据

艺术：日文 / 刘谦功著；(日)佐野慎译著．

— 北京：五洲传播出版社，2016.10

(中国文化系列 / 王岳川主编)

ISBN 978-7-5085-3552-4

I．①艺… II．①刘… ②佐… III．①艺术史—中国—日文

IV．①J120.9

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2016) 第 240702 号

主 编：王岳川

出 版 人：荆孝敏

统 筹：付 平

中国文化·艺术

著 者：刘谦功

翻 译：(日)佐野慎

责任编辑：苏 谦

图片提供：FOTOE CFP 东方 IC

出版发行：五洲传播出版社

地 址：北京市海淀区北三环中路 31 号生产力大楼 B 座 6 层

邮 编：100088

发行电话：010-82005927 82007837

网 址：<http://www.cicc.org.cn> <http://www.thatsbooks.com>

印 刷：北京浙京印刷有限公司

版 次：2017 年 1 月第 1 版第 1 次印刷

开 本：787×1092mm 1/16

印 张：10

字 数：180 千字

定 价：108.00 元

目次

序5

Part 1 書法

芸術としての文字9



甲骨文字

漢字の特性	9
文房四宝	14
書聖と天下第一行書	16
楷書四大家	19
飛揚する草書	22
伝統書法と現代生活	25

Part 2 絵画

無声の時に千年を称える28



張沢端筆「清明上河図」

中国画の持ち味	28
古今の人物を絵筆に収める	31
美人画の情緒	37
山水画に思いを寄せる	40



鄭板橋筆「竹石圖」

花鳥画の味わい45

集大成

『清明上河図』50

筆墨は時代を追う54

Part 3 彫像

三次元空間の芸術60



始皇帝陵の兵俑

東洋趣味の造型芸術60

古代の青銅彫像63

兵馬俑から「秦王掃六合」を見る67

仏像の中国化70

東西の都市彫刻78

Part 4 音楽

心を突き抜ける音82



顧閎中筆「韓熙載夜宴図」

心で感じる「楽」82

糸竹管弦を知らず多少ぞ85

古曲悠々90



テレサ・テン

心に響く民族の歌声	94
歌声を奏でる 歌の大普及	99
新時代の中国音楽人	104

Part 5 舞踊

生命の躍動 109



唐代の舞俑

歌い尽くせぬ想いを踊りに	109
雅楽の舞	112
伎楽舞の黄金時代	115
おどけた民間舞踊	119
大自然を舞う	122
舞い出す生命の輝き	125

Part 6 演劇

舞台上の小宇宙 129



京劇の臉譜

古の芸術	129
戯曲の歴史 誕生から成熟へ	133



昆曲『西廂記』

雅の極致 昆曲137

世界に名をはせる Beijing Opera139

ギリシャの Drama から中国の現代劇まで143

付録：中国歴史年代早見表148

目次

序5

Part 1 書法

芸術としての文字9



甲骨文字

漢字の特性	9
文房四宝	14
書聖と天下第一行書	16
楷書四大家	19
飛揚する草書	22
伝統書法と現代生活	25

Part 2 絵画

無声の時に千年を称える28



張昉端筆「清明上河図」

中国画の持ち味	28
古今の人物を絵筆に収める	31
美人画の情緒	37
山水画に思いを寄せる	40



鄭板橋筆「竹石図」

花鳥画の味わい45

集大成

『清明上河図』50

筆墨は時代を追う54

Part 3 彫像

三次元空間の芸術60



始皇帝陵の兵俑

東洋趣味の造型芸術60

古代の青銅彫像63

兵馬俑から「秦王掃六合」を見る67

仏像の中国化70

東西の都市彫刻78

Part 4 音楽

心を突き抜ける音82



顧閔中筆「韓熙載夜宴図」

心で感じる「楽」82

糸竹管弦を知らず多少ぞ85

古曲悠々90



テレサ・テン

心に響く民族の歌声	94
歌声を奏でる 歌の大普及	99
新時代の中国音楽人	104

Part 5 舞踊

生命の躍動109



唐代の舞俑

歌い尽くせぬ想いを踊りに	109
雅楽の舞	112
伎楽舞の黄金時代	115
おどけた民間舞踊	119
大自然を舞う	122
舞い出す生命の輝き	125

Part 6 演劇

舞台上の小宇宙129



京劇の臉譜

古の芸術	129
戯曲の歴史 誕生から成熟へ	133



昆曲『西廂記』

雅の極致 昆曲	137
世界に名をはせる Beijing Opera	139
ギリシャの Drama から中国の現代劇まで	143

付録：中国歴史年代早見表	148
--------------------	-----

序

芸術は人類の発生に伴って生じ、過去から現在まで絶えず発展してきた。中国芸術は世界から見ても異彩を放つユニークな存在である。その特色は中国古代の文学評論家、劉勰^{りゅうきやう} (約 465 ~ 520) が『文心雕龍』において提唱した「風骨」理論によく表れている。この「風骨」こそ中国芸術の神髄であると言えるだろう。

「風」と「骨」とは一動一静、互いに切り離せぬ存在である。

自然は絶え間なく変化し動き続けるもので、生命もまた同様に絶えず躍動するものである。つまり動は自然サイクルの表れであり、生命が存在している証なのだ。フランスの彫刻家、ロダンが創り出したのは物静かな彫刻芸術だが、実際そこにはさまざまな動が表現されている。彼の芸術観は「『動』は宇宙の真の姿であり、生命や魂、さらには自然の奥深くに潜む不思議なものたちを表現できるのは『ダイナミクス』だけだ。」(『ロダン芸術論』) というものだ。中国彫刻も然り、漢の時代の青銅彫像『馬踏飛燕』は正に異常な「静」が却って異常な「動」を表現していると言えよう。このような静と動の弁証法的な関係は中国芸術の中によく見られる。書法の草書と楷書、絵画の山水画と花鳥画、彫像の静態と動態、音楽の継続と休止、舞踊の飛揚と静寂、演劇の殺陣と見得、静と動の関係が現れぬものは一つとしてない。静と動は常に表裏一体である。嵐の中には山がそびえ、春の景色には鶯が息づくように、動の中に静があり、静の中に動がある。自然界にはもともと絶対的な静や絶対的な動などは存在しないのだ。

中国芸術の「風」「骨」における動と静について語るのであれば、具体的には長い歴史を持つ書法と絵画がその裏付けになるだろう。またあ

る意味では、書も絵画も舞に通ずるものがある。その構造や勢い、力強い筆遣いの効果は「風」と「骨」が作用し、動と静が融合した結果として生まれる。「風」は人々に生き生きと躍動感のある動態美を感じさせ、「骨」は安らかで洗練された静態美を感じさせる。「風」と「骨」が調和してはじめて独創的な美の境地を築くことができるのだ。

「風」と「骨」とは一虚一実、互いに生かし合う存在でもある。

中国の書法、絵画、彫像、そして音楽、舞踊、演劇などはすべて空白を重視する。この空白とは本当に空っぽという意味ではなく、自然の風や生命の息吹が流動する空間のことである。風は「虚」として気品を映し出し、骨は「実」として精神を表現する。詩歌や絵画にも虚実が共存している。霞で太陽や月を描き、草木で季節を描くことで、有と無の間には風骨が現れ、有限の中から無限を見出すことができる。唐の詩人、岑参^{しんしん}（約715～770）が描写した雪景色、「忽として一夜春風来たり、千樹万樹梨花の開くが如し」（『白雪の歌 武判官の帰京するを送る』）は詩中に画有り画中に詩有り、動中に静有り静中に動有り、という言葉を実によく体现している。

中国の歴史を振り返ってみれば、晋代の人々が最も風流で、山水をよく鑑賞し、実から虚を見出し哲学的な境地へ足を踏み入れることに最も長けていた。この点は特に絵画の中に現れている。例えば、顧愷之^{こがいし}（348～409）の『洛神賦図』には洛神と曹植がたびたび登場するが、それぞれの独立した画面が山水の背景の中で統一され、「人は山より大きく」、「水には浮かべそうもなく」、虚と実が交互に出現する。さらに、中国の花鳥画に描かれた花や鳥、魚や虫などは果てしない宇宙の中に落とされたかのように、道家の哲理をもって自然や人生を体感させ、広々として透き通るように澄み切った美の境地に達している。このような素晴らしい対比は虚と実があってこそ表現できるのだ。虚とはより広大で奥深い実であり、実もまたより味わい深い虚である。虚と実が互いに生かし合ってこそ、作品はより魅力的なものになる。

虚と実を語るには、中国の伝統戯曲について触れなければならない。『三五歩行遍天下、七八人百万雄兵』という演目は虚実を巧く取り込んでおり、鞭で馬を、櫂で船を、つまり道具を用いて実際には存在しないものを表現している。中国戯曲の役者はそのような演技を通して、次第に身のこなしの美しさを重んじるようになった。彼らは動作の現実味には拘らず、観客もまたそれを追求することはしないで心の中で補完する。

「風」と「骨」とは一柔一剛、互いに調和する存在である。

「風」は有声無形、柔和で滑らかで、「骨」は無声有形、剛健で固い。「風骨」の剛と柔は中国の書法、絵画、彫像、音楽、舞踊、演劇などの分野で意を尽くした表現がなされている。

書法の柔と剛に関しては、唐代の孫過庭(646～691)の著書『書譜』に「纖々乎似初月之天涯、落落乎猶衆星之列河漢、同自然之妙有、非力運之能成。」という生き生きとした表現での記述がある。具体的には、書法において筆を用いることが最もよく剛柔の対立と統一を表現できるということを述べている。穂先が紙に付く前は剛も柔も存在しない。穂先が一度紙に触れた瞬間、剛と柔が共生し互いに依存し合うのだ。構図の良し悪し、用紙の白黒、呼吸の遅速、全体の調和など一つでも欠けば剛と柔は生まれない。例えば、東晋の王献之おうけん し(344～386)の字は「既雄且媚」と評される。「雄」とはそびえ立つ岩の毅然さのような「剛」を表し、「媚」とはさらさらと流れる水の穏やかさのような「柔」を表す。王献之の『鴨頭丸帖』や『洛神賦』などはすべて柔と剛が調和した不朽の名作である。

剛と柔は中国舞踊においてもよく表現されている。例えば、唐代の舞踊は健舞と軟舞に分かれる。『剣器』『柘枝』『胡旋』などの健舞はリズムが軽快で、動作も大きく、俊敏かつ勇壮な風格を備えている。『緑腰』『涼州』『春鶯囀』などの軟舞はゆるやかなリズムと柔らかい動作によって優美さやしとやかさを表現する。剛と柔は健舞と軟舞という形で鮮明な対比を形成し、互いに調和することで唐代の舞踊を彩っていた。

つまり、「風」と「骨」は一動一静、一虚一実、一柔一剛、それぞれ中国芸術の各領域において体现されている。「風」と「骨」の動静相宜、虚実相生、柔剛相済は中国芸術の独特な風格を形成してきた。ある意味では、芸術とはもっとも哲学に近く、芸術が表現する自然や生命は外面を透って直接内面に入り込んで来る。「風骨」の概念は弁証的で、哲学的な階層に昇華することができる。そのため時間が経つほど価値が増し、中国芸術の神髄たり得るのだ。

書法 芸術としての文字

書法は中国特有の芸術ジャンルである。書法は魂を投影し、情趣を作り、人格を表現することができる。この特徴は漢字の特性に由来する。漢字の形象性が中国書法芸術の形成を可能にしたのだ。悠久の歴史の中で、中国書法は多くの物質文化と精神文化の要素を吸収し、大いに発展し続けてきた。

漢字の特性

中国初期の文字は様々な物品の上に出現する。現在までの考古学的発見の中で、陶器は中国古代人が最も早く漢字を書き記したものの一つである。とある考古学者により山東大汶口文化遺跡において紀元前 3000 年頃の文字が刻まれた陶器を発見されたが、これらの文字と古代文字には相似点があった。例えば、「旦」という字を意味すると思われる図形の描かれた陶器である。上の「日」は太陽で、下の「一」は山や雲を象徴し、日の出の瞬間を意味している。こうして見ると、漢字は形象を基礎として図形に加工、



大汶口文化陶器とその表面に刻まれた「旦」の符号。これらの符号は中国最古の文字と認定することができる。

調整を加えて表意文字となったことが分かる。

甲骨文字は中国大陸で発見された古代文字の中でも比較的体系立った文字で、漢字の歴史の中に時代を画する意義を持つ。甲骨文字はその名の示すとおり、亀の甲羅や動物の骨に刻まれた文字である。それは陶文の手法を継承し、中国の商代（前 1600 ～ 前 1046）に人々が占いを記録したり、亀の甲羅や動物の骨に字を書いたり刻んだりしたのと同じものである。現在までに出土した文字の刻まれた甲羅や骨は 15 万にもおよび、そこに



甲骨文字は体系化され比較的成熟した文字である。その画線は細く真っ直ぐで古風な美しさを醸し出している。

刻まれた文字の数はおよそ 5,000 文字にのぼる。甲骨文字はそれ以降の漢字の発展の基礎を固めると同時に、すでに書法の基本要素である筆、字体、構成の三つを備えていた。つまり書法芸術の始まりはここに形成されていたと言えるだろう。

きゅうしやくけい
裘錫圭は『文字学概要』において漢字の歴史を簡潔にまとめている。「商代後期から換算したとしても、漢字はおよそ 3300 年の歴史を持っている。この長い時間の中で、漢字は形体あるいは構成においてだけでなく、一連の重要な変化を生じてきた。形体をとってみれば、漢字は主に簡略化の歴史をたどった。このような変化は字体と字形の両方に表れている。……構成面では主に三つの変化が生じた。1. 形声文字が次第に増加した。2. 使用される意符が形符主体から義符主体に変化した。3. 記号文字、半記号文字が増加した。」今日の漢字は、その表音方式と実際の表音文字は異なるものの、一種の語素一音節文字または意音文字となったのだ。

漢字の変化に伴って中国書法芸術も変化してきたが、最も重要なのは